

千絵さんは山口県長門市出身。夫・英馬さんは石川県小松市出身。周くんは積雪60cmを記録した大雪の日に自宅出産にて誕生した。近所の人からは頑固者、意思の強い子という意味の方言「こゝろど」と呼ばれて可愛がられている。



庄原は寒い上、湿気も多く綿栽培には不向き。しかし同じ様な気象条件で育つ品種「会津和綿」を英馬さんが見つけ、現在は4品種育てている。毎年種を取り土に馴染ませ、綿作りに適した土壌作りを続けている。

「食の大切さを感じている」と話す夫妻は、米も野菜も無農薬で育てているため手入れに余念がない。田植えは機械を入れず、手作業で行った。近所の人や同じように移住してきた家族が手伝ってくれる。



ふれあう！
自然を相手に日々新しい遊びを発見
子どもは自然を相手に次々と新しい遊びにチャレンジ。近所の川や山は絶好の遊び場に。自然の中で危険を見極める力も自ずと身に付きます。



試作で作ったストールやこれから周くんの服になる生地。染色は近所に自生した植物や庭のマリーゴールドで染めている。「色留め」の工程でも化学薬品を使わないのでほんのりした色あいに仕上がる。



綿の収穫からはたおりまで全て手作業。綿から糸にする工程は微妙な力加減で糸の太さが変化し手つむぎならではの温かみのある糸に仕上がる。糸車やはたおりなど古道具は英馬さんがメンテナンス。



大きなはたおりをバタバタとならしながら布にしてい。全ての工程で化学薬品を一切仕様しない国産オーガニックコットンの布を作るのは並大抵のことではないが、千絵さんは手間のかかる工程を育児の合間に少しずつ行っている。



庄原暮らし歴
3年



うえだ ちえ
上田 千絵さん

染織作家

〈家族構成〉

上田 千絵さん

夫 英馬さん

息子 周くん

町全体が結婚を祝福！
現在は綿花作りに挑戦中

口和町へ2015年に移住してきた千絵さん。結婚、出産、子育てといった人生の大切な節目をこの町で経験した。「人情味あふれる人たちはばかりで、わからないことは教えてくれるし、お裾分けも頻繁にしてくれるのでありがたい。息子の成長も孫のように見守ってくれています」と地域の方と交流を深め、移住3年目ながらすでに里山での生活をしっかりと送っている。大学在学中に発生した2011年の東日本大震災と福島県原発事故以降、改めて衣食住に目を向け、暮らしの本質を見つめ直したいと考えるようになり移住を決意。2012年に福島県いわき市から口和町へ移住した福元さんが営む「ふくふく牧場」の再建を夫の英馬さんが手伝ったことがきっかけで口和町の魅力を知り、移住先に決めた。住居は口和自治振興区の地域マネージャーが

サポート。「定住前の相談で不安も解消されました」と英馬さん。移住後、2人のために地域の人たちが盛大な結婚式を行って話題に。2人の門出を祝福しようと沿道には300人も町民が集まったそう。晴れ姿は庄原市の広報紙の表紙も飾った。「消防団の余興などとても楽しく温かい結婚式をしていただきました」と笑顔で話す。千絵さんは現在、周くんの子育ての合間に染織を行っている。緑豊かな口和町に住むなら、畑で綿花を育て、植物で染色し、からだに優しい布製品を作りたいと思い大学院を卒業後、倉敷で染織を学んだ。「まずは家族が着る服から作っていきます」とスタートしたばかり。将来は土間をギャラリーにして、布製品や英馬さんが畑で作った無農薬大豆の加工品を販売するそう。ギャラリー完成の日が今から待ち遠しい。